

## 近世文學に現れた七墓参りについて

野 間 光 辰

七墓参り、一に又七墓廻りとも七墓巡りともいふ。七所の墓所を巡歴して念佛回向を手向くるの謂で、恐らくこの風習は全國にも及んでゐたのであらうが、上方を中心とする近世文學においては、京・大阪の七墓参りを除いて、他は全く所見がない。却て後年には上方の特殊風俗のやうになつてゐたかの如き観がある。中でも特に有名であつたのは、大阪のそれであつた。

七墓参りの起源とかその宗教的意義とかについては、私は全然知るところがない。たゞ濱松歌國の記載によれば、「例年七月十五日の夜、七墓廻りとて、七所の墓所に詣でて、夜もすがら鉦打ならし回向をなす、是全く浮世の爲にあらず、死て葬式の日、風雨の難なしといひ傳へり」といふ。『攝陽落穂集』この文の物せられた文化の初年頃には、大阪ではかゝる傳説が信じられてゐたのであらうが、しかしこれはやはり一の俗説であつて、死者の菩提を弔ふのがその第一の理由であつたであらう。これについて思ひ合せられるのは、あの鉢叩きのことである。『日次記事』には平定盛發心の經緯を記して、今鉢叩きの徒が鉦を鳴らし、念佛を唱へ、夜々洛外の五三昧を回向して廻るのは、即ちこの定盛の道風にして、又一遍上人の遺教でもあると傳へてゐる。(十一月十三日の條)これは勿論臆測に過ぎないのだが、或は俗間七墓参りの風習もかうしたものの變形であつたかも知れない。最初はやはり形だけは僧形をした道心者が修行のために行つてゐたのであつたが、それが漸次一般に擴つて、江戸時代の末頃には物見遊山の氣分で出かけるものも多く、一の流行となつて、つ

ひには幕命によつて禁止された程であつた。

前引の『攝陽落穂集』には「例年七月十五日の夜」とあるが、必ずしもさうとは限らなかつたやうだ。元祿十五年刊行の近松の『賀古教信七墓廻』これは題にも掲げたやうに教信が眞光を尋ねて七墓廻りするところが、この一曲の一の見せ場であつたのであるが、「尋ねらるゝも尋ぬるも、いづくあてどの五月闇、」夏野の迷ひ子とある。季は夏である。更に又貞享三年刊行の『諸國心中女』卷三「青き火に人間化して狐塚」には、「短夜には日の内より出、秋より春の半までは日くれて出て、いつも廻向を晨朝にとこゝろさす」とある。さうして見ると、貞享・元祿の頃には殆ど一年中行はれてゐたものらしい。そして同じところに、「初七年禁足の行を修し功なりて後、喪毎洛外七所の墓所詣をはじむ」とあり、近松の『一心二河白道』にも七墓参りの道心者のことが見えてゐるから、さうした念佛修行の道心者によつて行はれてゐたと思はれる。

京の七墓は『諸國心中女』によると、鳥部野・阿彌陀峰・新黒谷・舟岡・西院・狐塚・金光寺となつてゐる。最後の金光寺といふのは七條東洞院にあつた時宗の道場で、開山は一遍上人、世にこれを七條道場といふ。その外はいづれも洛外の墓所ばかりで、ほゞこの順序によつて廻つたやうである。

「例のごとく鳥部山の麓の煙たち出で、あみだがみねに鐘打ならし、鳥羽玉の黒谷山は月なくて、後の世のくらきみちの、おそろしくおもひ出らるゝより、願は弘誓の舟岡に乗じて、九品の蓮臺寺にこそとどりつく、北風やゝ寒くみんなみにはこび、西院に念佛し、狐塚にともしけつ青き火かりの、なき人のなごりにあらずも、心ありがほなる。」

洛の東から始めて北に廻り、それより西に轉じて南に終る。これで洛外を一周したのであらう。たゞこの所前の金光寺の代りに蓮臺寺が出てゐるが、その時々に応じて、順歴する墓所も少しづつ異つたのであらう。しかしまづ大體において所謂洛外五三昧を中心として廻つたのである。尤もこの洛外五三昧といふのも諸書によつて記載を異にしてゐる。或書に

鳥部野・中山・最勝河原・鶴林・狐塚を數へ、又一説には東寺四塚・三條河原・千本・中山・延年寺を擧げ、或は阿彌  
 峰・舟岡山・鳥部山・西院・竹田(又は中山)とも傳へてゐる。

大阪の七墓は、『賀古教信七墓廻り』を拾ひ上げてゆくと、「あだし煙の梅田の火屋」・「道もなき野原笹原原の火  
 の燃ゆる光」・「泣きく歩む夏草の蒲生の三昧」それとも知らで分れ行く末は小長谷のはかなやな」・「高津の墓所  
 夕立の雲のむらく風早み」・「煙じるべに千日の柴も命も一時の」・「是ぞ三途と一足に飛田の墓」とまづかういふ  
 順序になつてゐる。梅田から葭原・蒲生・小橋と北から東へ廻つて、高津・千日・飛田と南に轉じて終るわけである。こ  
 れは元祿の末頃のことであるが、江戸時代末期にはやゝ異つてゐる。『大阪宮寺巡』といふ横本の小冊子があるが、それ  
 には七墓廻りと題して、一番梅田・二番濱ノ寺・三番吉原・四番野田・五番小橋・六番葭田・七番千日とある。この頃に  
 は六地藏詣で・觀音三十三所詣でなど、共に並び行はれたので、かうした書物に纏めて梓行せられたのであらう。以てそ  
 の盛行の狀を窺ふに足る。

近世文學の中でこの七墓参りを主題とした作品には、前に擧げた『賀古教信七墓廻り』・『諸國心中女』の外に、西鶴の  
 『好色二代男』がある。『賀古教信』の方は、近松最負・淨瑠璃通の多い大阪の事だから、今更餘計な解説を加へる要を  
 認めないが、たゞ問題になるのは後の二つの浮世草子の作品である。『二代男』は貞享二年、『心中女』は翌三年の刊行  
 じ、僅か一年の相違で、相前後して七墓参りを作中に取入れてゐるのである。前にも述べたやうに七墓参りの起原は全く  
 知らないが、近世においては丁度この貞享・元祿頃が最も盛んであつたやうで、つまりこの新流行の事實を前記二書の作  
 者は逸早く自家樂範中のものとなして一趣向を立てたといふわけのだが、それにしても構想なり脚色なりが殆ど同じい  
 のは何としても可笑しいのである。

西鶴の『好色二代男』巻四、「七墓参りに逢へば昔の」の粗筋を語ればかうである。

「親仁の手前八十三度の説事も元の木阿彌、藤は然につれてもゆがみはなをらず、あたら春を過ぎて今となつて合點が  
 ゆけど六年おそし。」過書町の叔母舞に迄捨てられた身は、まだも坊主にならないではと、三十六の夏四月二日より墨の衣  
 に替へて、南中島の上しみを頼つて、柴の庵を結ぶ。銀なうて、揚屋の上する女・臺所の煮方する男にまで見落されて、  
 まだ性懲りもなう廊通ひにうつゝを抜かしてゐた時よりも、思へばきさんじな身の上である。軒の風鈴のぶらりと、日數  
 を過ぐすもよしなしと、隔夜に無常野の焼場を廻る。或夜道頓堀の火屋に詣でると、雨降り風立ち物の淋しき夜更けに、  
 後から呼びとめるものがある。見れば一人の女、これ志とばかり色黒き唐胡桃ほどのものを丸めて渡す。今一方の手には  
 炭俵を提げてゐる。二十一日の空ほのあかく、松の木の中に透してみるに、わけある姿、後世信心も忘れていな氣持にな  
 ったが、やれこゝが一大事と下帯を引締めて、女に事の子細を尋ねる。實は此女もとは新町にて太夫と呼ばれた名ある遊  
 女であつたが、勤めの身の内證の苦み、「せめては分知りの御方へ語り申すべし」とて公界十年の遺縁を語る。「さて持  
 ち給ふ炭こそ不思議」といへば、「過ぎつる十二月雪の夜に相果る時まで、此炭の口をあけず浮世に残すを惜まれし一  
 念の手はよごれても放さず」といふ時、さまざまの女の首飛來つて、亭主を奪はれし恨を晴らす。遊女「こは情なし、我  
 が知つたる事か、身は賣物にて人を騙するがもとでなり」といふと見てそのまゝ姿は消える。「禮場の朝風茂りの草ぼう  
 くと、石佛はありしまゝにて立歸るといふ筋である。

『心中女』の方は、かいつまんでいふとかうだ。若道故に出家して、今は洛東泉涌寺の片山陰に行ひすましてゐる。不  
 斷念佛の遁世者祐慶が、或年の秋の九月五日の夜、例によつて洛外の七墓を巡歴して狐塚に至る。既に念佛申して歸らう  
 とすると、その後からけうとく呼び返す人がある。はて怪しやと見れば、十六七とみえし美男と、これも廿あまりの女、  
 男は白の單衣に腹巻して刀を横たへ、女は同じく白小袖に仮名にて名號を一面に散らし書にしたのを着け、手には百八の  
 念珠を携へてゐる。何事にやと問へば、この二人の男女は互に隣同志に育つた筒井筒の幼友達で、長ずるにつれて文を通  
 はすでもなく媒を介するでもなく、自然に人知らぬ深い仲になつた。女十九の秋兩親の計らひにて女の縁が定まる。あら

ましごとゝかねて思へど、二世かけてと契る人をおいて、思はぬ人に見ゆべくもない。所詮憂き身一ついかにも成り果てんといふ女の覺悟を聞いて、死なば諸共と、夕月夜のさやかならぬに紛れ出で、此の藪蔭に女を刺殺し、自らも同じ双に臥した。けれども、相共に黄泉を辿れども、業障の雲深く、手をだに觸れず、目をのみ苦しむるに過ぎない。願はくば此の形見の品を證據として、親里に告げて給へとて、男は刀、女は念珠を捧げる。流石祐慶も哀にたえて黒染の袖に顔を埋めたが、再び見上げるともはや二人の姿はその場になかつたといふ。

この二つの物語、これを見比べ讀比べてみる。そこに盛られた内容には兩者自ら確たる相違があるが、話の道具立ては殆ど同一である。それもその筈で、兩者いづれも謡曲の『錦木』を原據として、それ／＼翻案したものらしい。つまり、『錦木』の諸國一見の僧が七墓参りになり、市人の夫婦の持てる細布と錦木が、『二代男』では炭俵になり、『心中女』では刀と念珠になつたといふわけである。後シテの男の靈と女の靈、これは『二代男』では吉原の墓で見た酒飲みの背高入道又は道頓堀の火屋で見た一寸法師の市春とあの新町の太夫とを配して辻褃を合せてゐるかと思ふと、『心中女』の方では、二人の心中死を遂げた若い男女に仕立てゝゐる。原據との距離といふ點からいへば、勿論『心中女』の方が謡曲に近い。けれどもその刊行年次からいへば『二代男』の方が一年ばかり早い。とすれば、謡曲の『錦木』を翻案して七墓参りの新流行をその作中に入れたのは、やはり西鶴が最初であつたといつてよいわけであるが、この頃の書物の奥付はあまり信用出来ないといふ説もある。

この問題を解決するには、『心中女』の作者の素姓を洗立てゝみる必要がある。序には「洛下寓居序」とのみ識されてゐるが、これが抑々怪しいのだ。かうした類似の匿名の序文を素線として、順次手繰り寄せてみると、猶外に『小夜衣』(三年刊)・『花の名残』(元年刊)・『宗祇諸國物語』(二年刊)・『好色伊勢物語』(同)等が挙げられる。しかも不思議にも此等の浮世草にはいづれも京都の書林西村市良右衛門關係のものばかりだ。そこで始めて疑問は氷解する。この『諸國心中女』も西村版である。西村版の浮世草子には彼の匿名の作品が多い。中には『好色三代男』のやうに西鶴の『二代男』のやうに

代男』と接續して作つたものもあつた。彼は其碩や自笑のやうに、西鶴本のそこかしこから文章を切取つて來るといふやうな事はしなかつたが、その趣向を真似るといふ事は随分黙つてやつて居る。この七墓参りの章にしても、陀度その傳に違ひない。しかも原據を中にして、西鶴と市良右衛門との作家的天分、作家的技倆の相違が、はからずも目の前にあからさまに示されてゐるのは面白い。猶この事については拙稿「七墓参りに逢へば昔の」に詳述しておいたから、今回はこれで筆を擱めることにする。

南濱源光寺境内に残る「是より東七墓道」の石標（東田手栞）

